ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

ローズクォーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

【Ｎコード】
Ｎ４５７０Ｚ

【作者名】
ローズクォーツ

【あらすじ】
友達がいない奴をあなたはどう思う？
友達なしで中学時代を過ごし、高校生になっても作る気がまったくない篠崎千遥（しのざきちはる）に近付く同学年の男子・永島龍斗（ながしまりゅうと）。
龍斗は学年でも無駄にモテやがる奴（千遥・談）で、性格も良い。
そんな奴大っ嫌いだ。
そんなひねくれ女子に近付く変わりもの男子の少しシリアスなラブコメディー？

一話（前書き）

初めての投稿で、少し変な文があるかもしれません。また、学生なので低クオリティーな小説です。

一話

「ねぇ、私に近付かないで欲しい。」

その言葉を言っても貴方は私に近付いて来る。

数日前、私は図書館で勉強をしていた。

頭は良い方だが高校に入っても友達は作らず、いつも孤立していた。

ちょくちょく話かけに来る人もいるが、本や勉強に集中したいので、適当に話を済ませるので友達となるものはいない。

友人がいなくて寂しい奴と思われがちだが、そんな事はどうでもいい。

高校生活なんてたかが3年程度。

青春を無駄にするな、と入学当時に言われたがむしろ学校に通うのが無駄だと思う。

勉強なら塾や家でも出来るし、芸術など生活の役に立つだろうか？

こんなことを中学時代に教師に言ったら、コミュニケーションがどうのこうの言っていた。

まぁ、そんな事だろう。

所詮人間は自分勝手に『あの人がムカつく』『あの人頭がおかしい』だの陰口を言ったり、最悪気に入らない人を殺したりする。

そんな人間関係だったら私は嫌だ。

私、篠崎千遥(しのざきちはる)はものすごくひねくれていると自覚している。こんな性格が最悪な奴と一緒にいても楽しくないだろう。

だから、自ら他の人と距離を置いていたのに。

まったく、馬鹿で変わっている奴だ。

一話（後書き）

変な文章ですみません。
誤字脱字があれば教えてくださいm（　）m

二話

さて、舞台は数日前の図書館となる。

勉強をしていると隣の方に人の気配を感じた。

べつに変な能力は持っていない。私の視野に入って来たからだ。

そいつは小声で私に話しかけて来た。もちろん聞こえないふり。

そしたら奴は肩を軽く叩いて来た。モチ、無視。

奴はあきらめたのかどこかに行った。よし、勝った。

適当に勉強を切り上げ、図書館を出た……、はずだった。

誰かが私のブレザーの襟を掴みやがった。

「ぐぅっ」と声を上げた私は誰だ、と思いながら後ろを向いた。

…ヤバっ。さっきの奴だ。

驚いていると奴は「やぁ、やっと気付いたね。」と笑いかける。

そして驚いている私を見て「やっぱり無視していたんだ。どうしてだい？」

「べつに私にはお前に話すことはない。だからさっさと失せろ。」

その話し方に驚いたのか奴の手が私の襟を離す。

そりゃそうだ。私は今、眼鏡を掛け、制服は着崩すことなくいわゆる優等生っぽい格好だ。
まぁ頭は良い方だが。
襟を離した隙に逃げようとしたが、今度は腕を掴まれた。
「待って、逃げないで。君と同じ学校の生徒だよ。」「そんなの服みりゃわかるに決まっているだろう！」「そうだけど。ちょっと話しがあるんだけど…。」
そう言われ私は仁王立ちして「3分以内に話せ。簡潔にな。」と言う。

「偉そうな子だな。噂と全然違う。」
「噂はあくまで噂だ。と言うよりどんな噂だ。」
「君は篠崎さんだよね。」「ああ、まぁ一応。」
「一応って…。えっと対人恐怖症で気が弱い。孤立していて成績が良い。…みたいな？」
「後半は合っているが前半が違う。べつに人と話すのは全く怖くない。」
「あと俺と話すかぎり気が強い。」
「……。」
「ああ、ごめんごめん。」
私が傷ついたような顔（演技）を見て慌てて謝ってくる。

「で、用件は？」
ケロッとした顔でそう言うと、悔しそうな顔をする。「演技か……。あぁ失礼だけど君って親しい人とかいないよね。」
「まぁな。べつに気にしていないが……。」
「じゃあ友達になろ♪」

「断る！」
「え！即答！なんで！どうして！」
「テンションがウザい。あと、『なろ♪』って言ったときの♪マークがムカついた。」
「友達になろう。」
「普通に言っても駄目だ。じゃあ、バイバイ。」
「あっ、待っ…。」

腕を振りほどいて私は走り出す。

幸い図書館から駅まで近いのですぐに階段を駆け上がり、振り返る。

奴は追って来なかった。
「はぁ、はぁ……。よかった。」

私は息を切らしながら電車に乗った。

三話

電車は空いていたので座ることが出来た。

それにしても……、今日は疲れた。

だってテンションの高い馬鹿に絡まれ、挙げ句全力疾走だもん。

もうヤダ、泣きそう。

……そういえば奴は私と同じ学校って言ってたな。

でも今日パッと会っただけだし、話しかけられたら無視すりゃいい。

そう自分で納得し、ちょうど降りる駅に着いたので電車を降りる。

駅の中の本屋で参考書を探す。前から欲しかった本はなかったが、新作の参考書が出ていた。

どこかの有名大学の教授が書いた英語の参考書であった。

興味が出たので、買ってみることにした。

店員に金を払い、商品をもらう。少しパラパラとめくり内容を確認する。

結構簡単な感じだったが丁寧に解き方などが書いてあり、なかなか良い本だ。

家に帰ってじっくり読むことにした。

四話

最寄駅から5分ほど歩くと私の家がある。
駅が近いので多分土地は高いだろうな。
私には関係ないがな。
さて、家に着いた私は鍵を開ける。
「ただいま。」と、言っても誰もいない。
私には物心ついた時から母親がいない。
父親から聞いた話しだとなんか離婚したっぽい。
まぁ、父と母はその程度の関係だったのだろう。
私は母親に会いたいとも思わない。
そんな私だから性格は最悪なのだろう。
とりあえず私は適当に洗濯物を取り込み、夕飯の下ごしらえをする。
家事は割と出来る方だと自負している。
あらかた家事を終わらせた私は買って来た参考書を開く。そして勉強をやり始めた。

２時間ほど勉強してから腹が減ったので、夕飯を食べた。

父親はいつも夜遅くに帰って来るので、ラップをかけておく。

腹が満ちたので少し眠たくなったが、明日も学校なのでシャワーを浴びる。

風呂に浸かると水道代がかかるし、少し面倒だ。

髪を乾かし、明日の授業の準備をする。

特に見たいテレビ番組もないし、友達がいないので電話やメールのやり取りもないし寝よう。

ベッドに入り目覚ましを5時半にセットする。

ベッドが私の体温で温かくなった頃、私の意識は飛んだ。

五話

――――ジリリリリリ！

不快な目覚ましの音が私の耳に入って来る。

手を伸ばして音を止める。

時計を見ればちょうど5時半で私は起きなければならない。

顔を洗い、口をすすぐ。

台所に行けば、空になった皿が机に置いてあった。

それらを洗い終わらせて洗濯物を洗濯機に入れてから弁当を作る。

朝食は弁当の余り物を適当に食べた。

食べ終わってから歯を磨き制服に着替える。

洗濯が終わったらしく洗濯機からピーっと音が鳴る。

洗濯物を干し、外を見れば太陽が少し顔を覗かせていた。

今日は晴れそうだ。

そう思いスクールバックを肩にかけ、革靴を履き家を出た。

うっとうしいほど朝日が降り注ぐ道を、私は駅に向かって歩き出した。

六話

駅に着いて改札口に定期を入れてプラットフォームに入る。

電車は数分後に来た。やや混んでいたが、空いている座席が一人分あったので座る。

何駅か過ぎてだんだん学生やサラリーマンが多くなってくる。

サラリーマンの中にものすごく疲れている感じのおっさんがいて、ちょうど私の前に来て『俺疲れていますから座席譲って下さい』アピールしていたが、無視する。

私だって疲れているんだ。

そう思っているとおっさんのアピールが終わった。

つくづく思うが私って性格最悪だな。たぶん結婚とか出来ないタイプだよ。

ほら、男子とかって優しい子とか気遣いが出来る子が好きな人多いし。

まぁ恋愛とかどうでもいいしな。

そんな事を考えていると降りる駅に着いた。

さて、学校に向かうか。

七話

学校に着いた瞬間、少し油断していた事を私は後悔した。
教室に入ると昨日の奴がいきなり現れた。
「――っ！」
「おはよう。昨日はいきなり逃げるなんて酷いな。」
と、奴は言う。そして……
『ビシッ』
額に小さな衝撃が走る。デコピンされた。

「！！！」
「お仕置きだよ。人に話しかけられたらちゃんと答えようね。」
「知らない奴に話しかけられたら逃げろって習っているが？」
「ちゃんとこの学校の生徒だって言ったじゃん。」
「同じ学校って言っても知らない奴だし！」
「俺は３組２５番の永島龍斗です！」
「ご丁寧にありがとよ！でも今やることじゃねぇ。」「龍斗って呼んで。甘える感じで♪」
「断る！」

ギャーギャー騒いでいると他の生徒の視線が私達に向けられる。
そりゃそうだ。私はほとんど騒がないし、言い争っている相手はそれなりに美形だ。
女子が少し陰口叩いたの聞こえたぞ。ったく女子は。
騒ぐのに夢中で時間が確認出来なかったが、ある程度時間が経った

のだろう。

ＳＨＲが始まる５分前のチャイムが学校内に響き渡った。

永島って言うヤロー「じゃあね。」と言って、自分の教室に戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4570z/

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

2011年12月18日10時55分発行